

安高啓明研究室×附属図書館連携企画展Ⅱ
解説シート

— 広告の歴史 —

日本では古くから商業活動が行なわれており、21 世紀の
現在では、大規模かつ多岐にわたる業種が存在している。
いつの時代においても、商業活動における宣伝・広告は重
要なものであった。

本企画展では、明治初期と昭和期の広告を用いて、その歴
史を紹介する。

ごあいさつ

平成 28 (2016) 年 4 月 14 日と 16 日に起こった熊本地震によって、熊本県と大分県では甚大な被害をうけました。これまで経験したことのない激震は、人命はもとより、住宅等にも被害を及ぼし、多くの人々に試練を与えました。また、市内では、地域コミュニティーで大切にされてきた史跡や石碑、信仰物など、今なお、被災したままの状態が続いているところもあります。

熊本城をはじめとする指定文化財が全国的に注目を集め、各地から支援をうけることができている一方、地域には、それぞれ心の拠りどころとされている有形・無形のモノがあります。文学部日本史研究室に設置した資料保全継承会議は、日本財団の支援を受けて、熊本大学周辺の史跡等の現状確認を行ない、今後、修復する過程での参考資料、そして、地震を風化させない“記録”として残すために悉皆調査を実施しました。また、甲佐町の旧家に残されていた被災資料を分類整理して目録を作成し、報告書として刊行しています。

昨年 11 月からは、産学官連携事業の一環として天草市立天草キリシタン館で被災資料と安高研究室の資料を用いた企画展示を行なっています。そして、平成 29 (2017) 年 6 月には、公益財団法人カメイ社会教育振興財団から、昨年調査した成果を、展示活動を通じて発信していく助成事業に採択されました。そこで、安高研究室に所属するゼミ生たちを中心に、各種テーマを設定した企画展活動を充実させていくことになりました。

研究成果、学術情報の発信を通じた社会還元、大学の地域貢献のひとつとして、本企画を附属図書館と天草キリシタン館で開催していきます。あわせて、将来、博物館学芸員への就業を目指す院生や学生たちへの実践教育の機会として、“学生が主役になれる企画展”を目指して、継続していこうと。

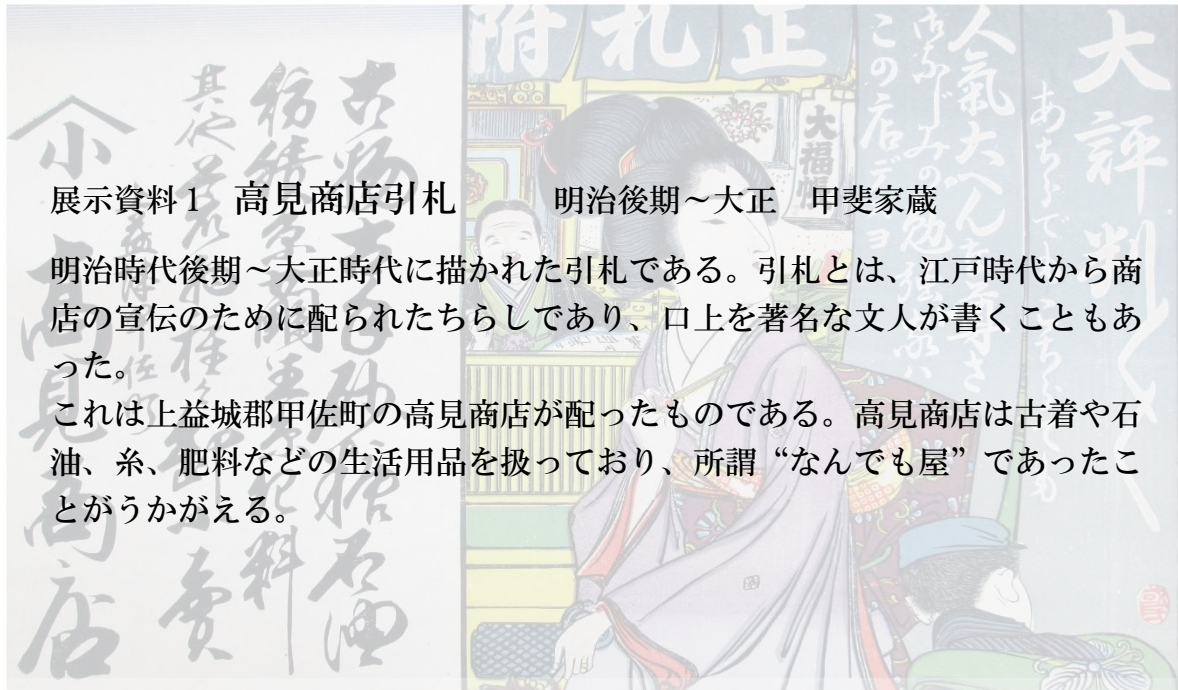
安高研究室では、地域に根ざし、地域に貢献できる学生教育を目指していく所存でおりますので、今後ともご指導、ご鞭撻賜りますようよろしくお願い申し上げます。

平成 29 (2017) 年 7 月 21 日

熊本大学大学院人文社会科学研究所
准教授 安高啓明

I. 広告媒体一引札

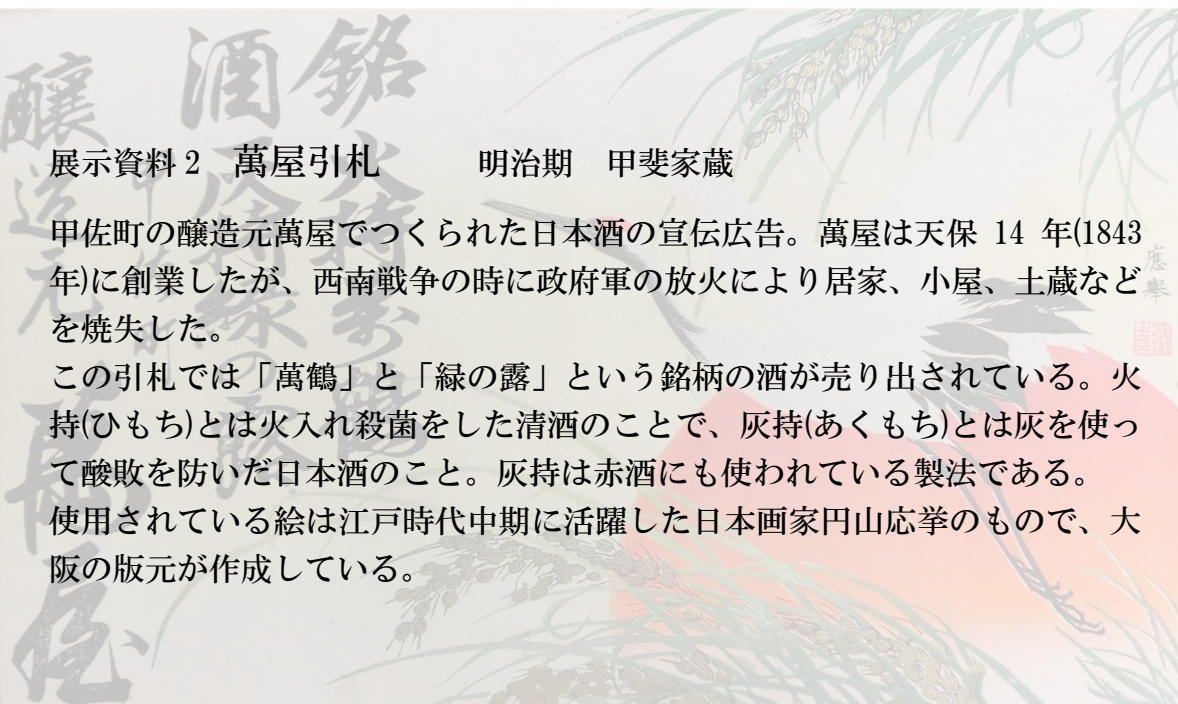
明治時代には商売のための広告が一般化する。
江戸時代の有名な画家の作品を素材としたものや、その店を象徴するものが描かれ、工夫されたものが作成された。今日とかわらない商売への意気込みがこの一枚の紙に込められている。



展示資料1 高見商店引札 明治後期～大正 甲斐家蔵

明治時代後期～大正時代に描かれた引札である。引札とは、江戸時代から商店の宣伝のために配られたちらしであり、口上を著名な文人が書くこともあった。

これは上益城郡甲佐町の高見商店が配ったものである。高見商店は古着や石油、糸、肥料などの生活用品を扱っており、所謂“なんでも屋”であったことがうかがえる。



展示資料2 萬屋引札 明治期 甲斐家蔵

甲佐町の醸造元萬屋でつくられた日本酒の宣伝広告。萬屋は天保14年(1843年)に創業したが、西南戦争の時に政府軍の放火により居家、小屋、土蔵などを焼失した。

この引札では「萬鶴」と「緑の露」という銘柄の酒が売り出されている。火持(ひもち)とは火入れ殺菌をした清酒のことで、灰持(あくもち)とは灰を使って酸敗を防いだ日本酒のこと。灰持は赤酒にも使われている製法である。使用されている絵は江戸時代中期に活躍した日本画家円山応挙のもので、大阪の版元が作成している。

Ⅱ. 広告媒体—協賛広告

娯楽の世界でも宣伝広告が用いられていた。
多くの人々の目にとまり、興味を持ってもらえるように、絵などを利用して工夫がなされた。特に協賛広告では、出資者の名前も重要で、字体も様々である。

展示資料3 道楽協会宣伝広告 昭和30年頃 安高啓明研究室蔵

道楽協会は、男芸者や、彼らに協賛する商店が所属する東京の組合であると考えられる。広告には源平合戦に関する歌舞伎の一場面が描かれている。中には、客の目を引くためにパロディを加え、面白おかしく仕立てているものもある。また、協会所属の歌舞伎役者・幫間(ほうかん)・噺家など芸者の名前と、商店名など協賛者の名前も書かれている。

※幫間とは宴席の場を盛り上げる男芸者で、「太鼓持ち」とも呼ばれていた



① 袈裟のにせおかみ

源渡の妻袈裟御前が遠藤盛遠に横恋慕され、夫の命を救うため身代わりとなって殺される場面。本作品では、袈裟御前がさらに身代わりを用意して、遠藤盛遠を欺く様子が描かれている。



② 文覚荒行

源渡と誤って袈裟御前を殺してしまった遠藤盛遠は、それを悔やんで出家し、文覚(もんがく)と名乗るようになる。本作品は、文覚が瀧で荒行を行っている場面が描かれている。あまりに激しい瀧行であり、文覚は一度死んでしまうが、不動明王の童子に助けられ生き返ったという伝承がある。



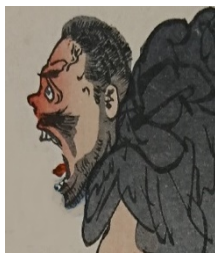
③ 朝比奈草摺引

兄曾我祐成の危機を知った曾我時致が鎧を掴んで駆け出すのを、小林朝比奈が止めている場面。朝比奈は男性であるが、悪身といって女性をまねている状態で描かれている。小林朝比奈の代わりに男勝りの妹舞鶴が出される演出も多く、本作品の幼児は舞鶴であると考えられる。



④ 曾我の夜討ち

幼い頃、所領争いの末に父を殺されてしまった曾我祐成・時致兄弟が、父の仇である祐経を討ちに屋敷へ押し入った場面。実際には祐経は殺されてしまうが、本作品では、後ろで曾我兄弟に向かって舌を出し、侮辱している場面が描かれている。



⑤ 弁慶五条の橋

1000本の太刀を奪うために道行く人を襲っていた乱暴者の弁慶と、牛若丸(若き源義経)が五条大橋で出会う有名な場面。牛若丸に襲いかかった弁慶は返り討ちにされ、牛若丸の家来になる。



⑥ 義経八艘飛

壇ノ浦の海戦で敵将平教経に追われた際、かなわないと思った義経が、8艘の船を次々飛んで逃れたという場面。本作品では、鎧を脱いで逃げる義経がコミカルに描かれている。

助成：公益財団法人カメイ社会教育振興財団(仙台市)

作成：島由季 / 久保春香(日本史研究室)



ありがとうなのじゃ